

論 文

「社会意識」調査法の基点

Grundlegung zur Methode der Untersuchung des gesellschaftlichen Bewußtseins

梅 澤 啓 一

はじめに

美的判断は主観的なものである。ところが、それにもかかわらず、個人が美的なものとしてとらえたある対象が、なぜ万人にも美的なものとして普遍的にとらえられるのであろうか。カントは、この「主観的普遍性(subjective Allgemeinheit)」¹⁾の問題を、簡約すれば、次のように説明している。

認識が普遍的に伝達される際には、認識作用の主観的条件である調和的気分(Stimmung)である心情(Gemüt)も普遍的に伝達されなければ、認識は結果として成立しえないであろう。この調和的気分の均衡(Proportion)の内的比例が、認識能力である構想力と悟性とを相互に「自由な遊戯(freies Spiel)」として活気づけるからである。もちろん、この調和的気分は(概念にしたがってではなく)感情(Gefühl)によって規定される。そして、この感情というものの普遍的な伝達可能性は「共通感覚(Gemeinsinn)」を前提としている。²⁾

つまり、カントは、ästhetisch(美的、感性的、直観的)判断(カントでは趣味判断Geschmacksurteil)の普遍妥当性すなわち主観的普遍妥当性の根拠を、万人に通用するものとしての「共通感覚」という「理想的規範」に求めている。ところが、この「共通感覚」は正確な規定もされず、無規定な規範としてア・プリオリに前提されているにすぎない。ここから、カントの意図する「共通感覚」の意味合いがさまざまに論議されることになる。

たとえば、水野邦彦は、カントの述べる「センス・コムニス(sensus communis)」すなわち「共同体感

覚(gemeinschaftlicher Sinn)」を「共通感覚」と対置する。そして、前者は趣味判断や認識判断や道徳判断を含めた判断一般に関わるもので、「自分の判断をいわば人間理性全体でささえる」のであるから、後者の共通感覚を含んだ包括的な判断である³⁾とし、後者から前者へ、すなわち美学から社会哲学への方向を探ろうとしている。日常われわれが下す判断の大半は論理的・感性的の両要素をあわせもったものであるので、この判断の普遍妥当性を何らかの方法で確保しなければならないという要請からである。⁴⁾ただし、水野の感覚論すなわち「感性論」は、感性のア・プリオリな形式を分析するカントの「超越論的感性論」ではなくて、時代・民族・風土・地域・家族といった環境によって影響を受けながら生活の過程で形成されるア・ポステリオリな感性を課題とする「経験的感性」を課題としている。⁵⁾「感性はもともと共同体のなかで形成され、本質的に社会的性格を帯びている。しかもそれにとどまらず、形成された感性は共同体に反照し、共同体を再生産する。そこで共同体に固有の感性も再生産されるのである。とすると感性は、社会を反映すると同時に社会を指向するということができる。感性が社会的感覚、共同体感覚と呼ばれるゆえんである。」⁶⁾

たしかに、美的判断の普遍妥当性の問題をこのような社会的な相で解決しようと試みることは必要不可欠なことである。この主観的普遍妥当性の根拠を、「共通感覚」以外の何らかの普遍的なもの、たとえば人間として共通にもっている生得的な「素質」や「遺伝」、あるいは決定的に普遍的だと一見考えがちな「人間性」

などの概念に求めたとしても、この社会的相を無視することはできないであろう。素質や遺伝の発現は教育を含む社会的文化的環境に制約されながらも、この制約を人間が主体的に統制することによってなされるものであるし、人間性の内容も歴史的・社会的産物であって、時代や地域によって異なることは言うまでもないことだからである。したがって、一個の人間の感性の生成・発達の過程やそのメカニズム解明の問題も、このような歴史的・社会的制約のファクターも考慮に入れながら追究するという複雑な考察を要求されることになる。普遍的であるのは、感性がこのようなさまざまなファクターを媒介としながら生成・発達するメカニズムそのものだけなのかもしれない。

水野の論考では、美的感性と社会的感性の極めて一般的な規定で終わっているが、では、そこから一歩進んで、そのような感性の内容を具体的な事象に即して考察し、感性の本質や発達のメカニズムを明らかにするために、感性をいかにして現実の社会や生活のなかから取り出して考察したらよいのであろうか。このような問題意識から、本稿では、感性そのものの問題をあつかうに先だって、感性をも含む社会意識がいかなる契機をへて形成されるかを見ながら、そうした社会意識をとらえる一手段としての、いわば「社会意識調査」の方法について考えてみたい。

1. 社会意識の「主体性」と「社会的被規定性」

社会意識を扱ったものとして、さしあたっては、K.マルクスの「土台—上部構造」論が挙げられるだろう。マルクスによれば、生産諸関係の総体としての土台の上の一つの法律的・政治的上部構造がそびえ立つとともに、この土台に一定の「社会的諸意識形態」が照応する。したがって、「人間の存在を規定するのは人間の意識ではなく、反対にかれらの意識を規定するのはかれらの社会的存在である」ということになる。⁷⁾

ここで問題となるのは、まずは、社会意識が土台によって一方的に制約されるだけの存在にすぎないものととらえられて、「意識の主体性」が問題とされて

いないのかどうかということである。たしかに、エンゲルスは、「政治、法律、哲学、宗教、文学、芸術などの発展」と「経済的発展」との「交互作用」や前者の「経済的土台」への「反作用」のあることを（「究極においてはつねに自らを貫徹する経済的必要性に基づ」くものであることを堅持しながらも）述べてはいる。⁸⁾しかし、この問題は「土台—上部構造」をめぐるこうした抽象的な言い回しで説明しつくさるものではないであろう。ここで考慮すべき点は、「かれらの意識を規定するのはかれらの社会的存在」というくだりである。この点については、マルクスらが、ドイツ観念論を批判して、「意識とは意識する存在(das bewußte Sein)以外のなにものでもない。そして人間の存在とは彼らの現実の生活過程である。…中略…自分たちの物質的生産と物質的交通とを発展させていく人間が、みずからの現実とともにみずからの思考と思考の産物をも変えるのである。意識が生活を規定するのではなくて、生活が意識を規定するのである。⁹⁾」と述べていることに注目したい。石井伸男は、おそらくこの箇所を援用してのことであろうが、「意識が意識している存在＝人間存在によって規定されていること、人間の存在とはかれらの社会的な存在であり、それはかれらの生活過程であるから、意識はその意識を持つ人間たちの生活過程によって規定される」¹⁰⁾と述べている。ここからも示唆されるように、人間の意識は社会的存在たる人間自らが主体的につくりだした他ならぬ人間存在の証である生活ないしその過程によって規定されるのだという、「意識の主体性」の視点が肝要であると考えられる。

ところで、マルクスは社会意識がいかに規定されるかの問題について、「変革の時期の意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係との間に現存する衝突から説明しなければならない」と述べている。すなわち、社会意識の被規定性は、「諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる・社会的生産過程の敵対的形態」というものを解決しようとする課題意識である意識の能動性と、「ブルジョア社会の体内で発展しつつある生産諸力が、同時にこの敵対のための物

質的諸条件をもつくりだす」という社会意識の発生の客観的基盤との、矛盾関係から生じるとするのである。¹¹⁾では、このような社会構成体の移行に際して、社会意識は具体的にはいかに能動的にかかわっていくというのであろうか。

マルクスらは、分業とともに、精神的活動と物質的活動、享受と労働、生産と消費が、別々の個人に属する現実性として生じ、これによって生産力、社会状態、意識という三つの契機は相互に矛盾に陥らずにはないと述べている。¹²⁾ということは、社会意識をとらえようとするならば、この構造的契機を正確に分析してはじめて可能になるということになる。それでは、「意識の主体性」の視点との関係から、「社会意識」で以て具体的には何をいかに問題とすべきなのであろうか。

岩崎允胤は、社会意識には認識的側面（対象反映性）と社会的側面（社会的被規定性）とがあり、後者では、とくにイデオロギー的側面（社会の対立的二方向〔維持あるいは変革〕）によって反映内容が規定され、社会的利害・関心が表現され、それによって一定の社会的な力となっている側面（イデオロギーはそれ自身の相対的に自立的な機能を持ち、土台や、他の上部構造に反作用しうる）が考えられるとしている。¹³⁾

しかし、石井は、こうした社会的側面から見た社会意識の用法のようなこれまでのマルクス主義哲学の用法は、意識の社会的被規定性を問題にする場合、あまりにも広い概念となってしまい、意識一般と区別できなくなるとしている。¹⁴⁾たしかに、これまで意識の客観性の解明に際しては、「社会的なもの＝客観的なもの」というとらえかたに還元されて済まされてきたきらいがあり、これによって意識の本質や形成の機制が一面的にとらえられていたようである。岩崎のとらえ方では、「社会的側面」が客観的側面の問題としてとらえられてしまっており、本稿で問題としている「社会意識の主体性」といった「主観的」契機と「社会的被規定性」とのダイナミックな関係の解明には及ばないと見られるのである。

2. 社会学的「社会意識」のとらえ方

石井は、上の岩崎の用法の次に第二の用法（見田宗介、宮島喬らを指して）を問題にする。それは、ある社会集団の成員に共有されている意識を問題にしており、第一の岩崎の用法のとらえ方をさらに具体化したものだが、意識の主体として集団を置くことで、「社会的」という規定は個人を越えた外延的な広がりを示すだけとなってしまわないか、と批判している。¹⁵⁾この批判も妥当なものといえようが、ここで、宮島は社会意識の規定をとりあげて、このとらえ方についても少し考えてみたい。

宮島によれば、社会意識とは、その存在基盤との関連でいえば、民族、階級、階層、その他の社会諸集団の生活諸条件によって規定されつつ形成される意識であり、その機能の面からいえば、その存在条件を認識し、これを維持したり、あるいは変革したりする力（それ自身は観念力であっても、行為を媒介にして社会にはたらきかけていく力となりうる）であり、形態的には、イデオロギー、社会心理、ユートス、モーレス、さまざまな精神形象等に概念的に区別されうる。客観的カテゴリーとして考えられる社会構造との対比でいえば、「社会における主観的な過程および形象」ということになる。このように社会生活の主観的側面ともいえる現象を、客観的に在るところのものとして、客観的に追究するところに社会意識の研究が成立する。¹⁶⁾

この規定は社会意識の社会的被規定性と機能的能動性の両側面を的確に措定しているかに見えるが、問題はこの両側面を「客観的に在るところのものとして」とらえていることにあると考えられる。この方向が社会意識のいかなる把握の仕方をするようになってしまっているか、具体的な例で示すことにする。宮島自身も加わって、高度成長期後の低成長下の意識について調査がなされた。その結果はまとめてみれば次のように分析されている。

勤労者たちは高度成長について概してポジティブな評価を示しており（「石油危機」後の“不況”経験ゆ

えのたぶんに懐旧的な態度のためではなかろうか)、「仕事が苦しくなってきた」と答えた者は半数近くに達しているのに、仕事への満足度は必ずしも低くはない。「満足」38.3%、「まあ満足」26.5%、合計65%弱。所得階層別にみても、いちおう月収50万円以上の層では仕事満足度は高まっているが、その相関はかなり部分的であって、全体としてみるとその関係は不分明である。20万円以下の低所得層にとくに不満がつよというわけでもなく、50万円以下ではこれといった顕著な差はみられない。推測として、勤労者たちは、低成長期にはいって、時間経過とともにそれなりにみずからの欲求の水準を調整し、実質賃上げがほとんどゼロという状況のもとでも、現在の仕事を多少とも肯定的にうけいれるべく心理的な適応をはかってきたためではないか。あるいは、不況に呻吟している世間というものが比較のためのレファレンス・グループの機能を演じ、自分は「まだまし」という意識を醸成したのではないか。いったい、仕事への満・不満、より一般的にいえば仕事への評価というものがなにを意味しているかという問題については、べつにたちいった検討が必要であろう。しかし、ここではとりあえず以上のかぎられたデータの提示と解釈にとどめざるをえない。¹⁷⁾ 仕事、暮しにおいて出会う諸問題の解決がきわめて個人主義的に考えられているのが都市勤労者の現状であるが、これをかれらの孤立化と社会的関心の後退のあらわれとみるか、政府や組織(経営、組合)への即自的な依存態度からの脱却(主体化!)として積極的に評価するか、にわかには論定しがたい、両義的な可能性がはらまれているように思われる。¹⁸⁾ 現状はともかくとしても、私生活重視、個人主義といった態度のベースの上に社会的・政治的意識の活性化のはかられる可能性をも、われわれは展望してよいのではないだろうか。¹⁹⁾

以上の分析には、このレベルの調査の限界があらわにされている。つまり、ここでなされている解釈は推測の域を出ることはないのである。しかも、このような解釈では、人々の現状と意識の積極的な側面とがいかなる構造をもって現存しているかを示すことができ

ず、人々の生活の展望の指針となるようなものはつかめないであろう。

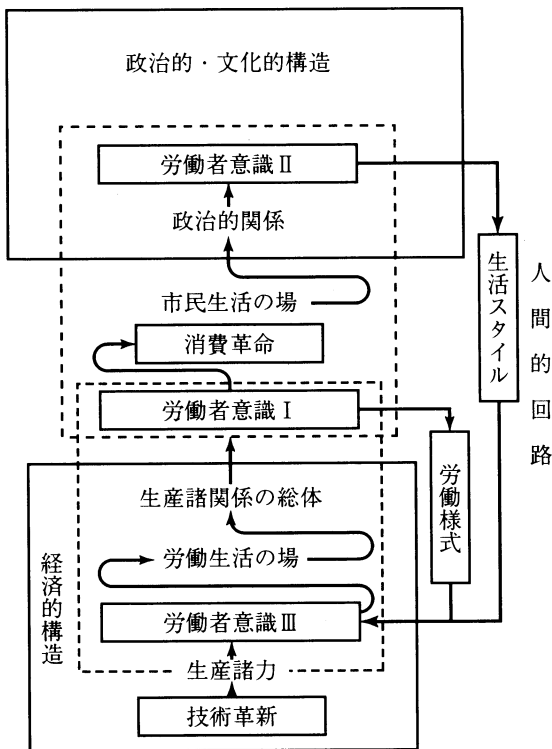
田中義久も、「〈即自的〉生きがい—〈対自的〉生きがいの軸」と「〈個人優先〉の生活のかまえ—〈非個人優先〉の生活のかまえという軸」をとらえる全国調査を行ない、現代日本の社会意識の布置連関の裡から日本的〈主体〉類型(1.〈個〉の類型, 2.〈私民〉の類型, 3.〈庶民〉の類型, 4.〈大衆〉の類型)を析出した。²⁰⁾ だが、時代的あるいは地域的制約によって相対的な差異を見せているすぎないこのような社会意識の現象の類型分析で、その時代あるいは地域の特殊性のもとでの社会意識の形成・発達のメカニズムのような本質的なものがつかめるとは思われない。

また、庄司興吉は、「労働者の意識をめぐる構造論的事実の布置」として、次頁のような「土台—上部構造」をもじったような図を提示して、次のように解説している。

構造論的にみれば、労働者意識は、まず労働生活の場をつうじて技術革新に規定され、ついで市民生活の場をつうじて消費革命に規定されるのであり、螺旋状の規定関係の中間部と上部とに二度現われるのである。中間部のそれを〈労働者意識Ⅰ〉とし、上部のそれを〈労働者意識Ⅱ〉としよう。しかし、それならば、労働者意識はそれ自身が生産諸力の一部でもあるのだから、螺旋状の規定関係の下部に〈労働者意識Ⅲ〉を考えてはどうしていけないであろうか。労働者意識Ⅰは媒介変数としての社会意識であり、Ⅱは従属変数としての社会意識であり、Ⅲは独立変数としての社会意識であることになろう。すなわち、労働者意識Ⅰは労働者の社会心理であり、Ⅱはイデオロギーや集合表象に近いものであり、これらに対してⅢは労働者のエートスおよび知識であることになろう。労働者意識が、社会系の構造を垂直的かつ水平的につらぬく螺旋状の規定関係の各所に現れるのは、労働者緒個人が、それぞれの場にふさわしい行為をつうじて社会系の構造の部分であるにもかかわらず、なお人間としてはこれらの行為の統一された全体であるからである。すなわち、労働者緒個人が、その人間的な回路をつうじて、その

意識を社会系の構造の各所に、とりわけ〈土台〉と呼ばれる部分のただなかにもちこむのである。²¹⁾

百歩譲って、労働者意識の構造がこのようなシエマで以てとらえられるものとしよう。だが、ここでは、社会意識をも含んだ「人間的回路」と呼ばれる構造が、生きた意識の主体的契機から造りだされたものとして扱われるのではなしに、客観的・「対岸的な」現象として提示されて在るにすぎない。社会意識の形成・発達のメカニズムをつかむためには、これら諸契機との連関のあり方が、意識の主体的機能の側面から形成的にとらえられる必要があろう。



庄司興吉「現代労働者の社会意識」より

3. 社会についての意識

石井は、社会意識の第三の用法として、「社会についての意識」を問題とする用法を掲げる。ここでの社会意識とは社会を対象とする人間の意識であるが、対象とされる社会の中には意識している当の人間たちが

含まれている。したがって社会意識にはその中核に意識主体の自己意識が存在する。ただし、この場合、上述の第二の用法の視点は生かされる。というのは、社会意識の担い手は自立的な個人ではなく、社会集団であることが現実には基本的傾向であるからである。²²⁾ 石井はこの用法を是とする。この用法は、岩崎の言う社会意識の「認識的側面（対象反映性）」を含む規定であろうが、以下にとりあげていくようにこの側面をはるかに越えた積極的な意味合いを持っている。私もこの用法に賛成であるが、この方向を推し進めるにあたって、最初にその基本的な姿勢について確認しておこう。

たとえば、マルクスは、対象や現実や感性を、たんに客体という形式あるいは直観という形式のもとでのみとらえるのではなく、感性的な人間の活動、実践としてとらえられること、すなわち主体的にとらえることを強調した。「人間の活動そのもの」すなわち「対象的活動」²³⁾ に注目することの意味については、たとえば、山科三郎が、マルクスの『経済学・哲学手稿』あたりからの援用であろうが、次のように述べている。

「現実世界は、さしあたり、人間の労働を中心とする対象的活動によって加工された世界である。それゆえに、さまざまな目的を実現する媒体（手段）の体系としての、人間の本質的諸力が対象化された世界である。人間は、潜勢的には、対象的活動によって、自然の制限からの解放にむかって生きる身体的・精神的諸力を獲得した。人間は自然的・社会的存在となった。人間と対象的世界とのあいだに、よりあたらしい質の連関をつくりだすことにこそ、その獲得された富の実践的な意義がある。その富は、一世代かぎりのものでも、あれこれの個の占有するものでもなく、社会（共同体）という有機体のなかに、人類史のあゆみをつうじて蓄積されてきたものである。それゆえに、富は普遍性をもっている。」²⁴⁾

現実の社会は、人間と対立的に外部に存在しており、人間がこれに一方的に制約されているといったように受動的にとらえられるものではなく、他ならぬ当のわれわれがそれぞれの立場や思惑に立脚して、客観的実

在たる自然的諸形態を變形することによってつくりあげている矛盾の統一である。したがって、社会は、単に物象化されたもの、疎外形態として現象的にあつかわれるのではなく、たとえば支配層と労働者層とがそれぞれの立場からいかに「能動的に」社会をつくりあげようとしているかの相でとらえられなければならないであろう。このような観点からすれば、この現実の社会に対するわれわれの社会意識は、支配層が自らの「富」を積極的に獲得する一方で大衆操作のために提供した事象形態と労働者・大衆が求め意図している形態とが、「ずれ」を持ちながらも一致して形成されているものと考えられるのではなからうか。したがって、このずれがいかなる矛盾を引き起こしいかなる社会意識の形態の方向性を生んでいくか、人々の求める方向の肯定的側面と疎外されいびつ化した否定的側面がいかに構造化されて形成されていくかのメカニズムを明らかにする必要がある。

岩佐茂は、人々のこのような社会意識の矛盾の二面性を、「日常的意識」の前進的契機と後退的契機との矛盾の二面性の相で以て次のようにとらえている。

個々の現象的認識は、一方では、それを認識する諸個人の社会的制約性や社会全体についての虚偽意識によって歪められ、主観的な偏りをもたざるをえない反面、他方では、社会的現実のある断面を的確にとらえているがゆえに、社会全体についての虚偽意識と矛盾し、対立することにもなる。しかし、日常的認識においては、この矛盾は緊張をはらみながらも、十分に自覚されることはないし、社会の科学的認識にいたることもない。日常的意識には、対象的認識とともに、それについての評価意識、生活主体の要求、利害・関心・生活の目標および規範意識といった価値意識も当然含まれている。すなわち、日常的意識には、日常的認識と価値意識とが統一されている。価値意識としての日常的意識にかんしても、その二重性を指摘できる。第一に、日常的意識には、その根底に、生活の論理に基づいた価値意識（生活価値）がある。人間の生活は、物質的生活からして共に生きること（共同性）とよりよく生きること（生の表現）とを不可欠の契機として

おり、日常的意識には、この二契機を軸にして形成される生活価値が含まれている。第二に、諸個人の日常的意識には、倒錯し、疎外された価値意識もまた含まれている。資本の論理は、エゴイズム、弱肉強食、拝金主義、等々の価値意識を生み出すし、物神崇拜は、物にとりつかれ、物を偏重する物質主義的態度をひきおこすことになる。このように日常的意識には、生活者としての価値意識と、倒錯し疎外された価値意識とが矛盾・葛藤しながら、緊張のうちに混在している。日常的意識の二重性のうち、前進的契機は資本主義社会にあっては労働者の階級意識に連続的につながる。労働者の階級意識は、生活する者の日常的意識のうちに即自的に含まれている人間的な要求・感情や利害の対自化であり、発展である。社会認識の深化の過程は、社会科学のカテゴリーの装置の助けを借りておこなわれる労苦にみちた過程にはかならない。しかも、それは、日常的意識の後退的契機によっても疎外される以上、前進的契機が後退的契機と格闘しながら、後退的契機を不断に克服していく過程として、矛盾にみちた、錯綜した過程とならざるをえない。²⁵⁾

社会的現実を的確にとらえた個々の現象的認識と社会全体についての虚偽意識との矛盾・対立、そして生活者としての価値意識と倒錯し疎外された価値意識との矛盾・対立、このような日常的認識と価値意識とを形成しているそれぞれの構成要素たる肯定的側面と否定的側面はいかに構造化して日常的意識を統一的に形づくり、またいかなるメカニズムでもってその質的転化＝発達を促しているのであろうか。以下に、石井の論点にそってこれを考察していきたい。

石井によれば、社会意識を把握するうえで確認すべき点には次の二つがある。

1. 社会意識は対象への実践的かかわりの意識化を本質とする。社会生活は本質的に実践的であり、人々は生活の必要・欲求からまわりの事物や人々に実践的にかかわる。この実践的かかわりから、それぞれの意識が生れる。その意味で人々がもつ意識は、人々が行っている実践の意識である。だが生活そのものに分裂や疎外が生じると、意識の疎外現象がおこる。意識は

実際の実践からはなれてひとり歩きをはじめ。

2. 社会意識は自己意識によって媒介され、規定される。社会的事象はすべての人々の相互関係からなりたっており、意識する主体自身が社会のなかに内在しその相互関係のなかに立っている。彼らは自らについて一定の自己了解をくだし、その了解された自己の見地から社会的事象についてさまざまに意識する。²⁶⁾

このように、社会意識は、生活の必要・要求からの対象への実践的かかわりの意識化と、自己意識を介しての社会的事象の意識化との二側面の統一から規定・形成されるということになる。したがって、社会と意識との関係であるこの契機においては、以下の石井の言に見るとおり、認識論的な意味の反映関係でのみとらえて済まされるわけにはいかない。

「社会的存在は意識を規定する」というマルクスの規定において、「社会的存在」とは、全社会的になりたつ社会関係（生産関係＝物質的社会関係）のことでなく、意識する主体である人間たちの生活諸条件のことであった。「社会意識は社会的存在を反映する（レーニン）」というテーゼは社会意識が意識そのものから独立した「社会」の反映であるという、それ自体では当然のことを主張しているが、反面人々の生活が、生活諸条件がその反映をどのように規定するかという問題をネグレクトしている。²⁷⁾

ようするに、社会意識は「事実の認識につくされるのではなく、それはまた価値意識という契機をもっている」のである。ここから、問題は、「この両者の関係」、「社会意識における自然成長性と目的意識性との関係」、「知識層の社会的位置、知識層と大衆との関係」²⁸⁾を明らかにすることである。

そこで、まず、石井は、「生活が意識を規定する」という基礎的視角から、生活の中での意識一般の位置、機能を探っている。²⁹⁾

生活とは第一に、「生命の生産と再生産」を基礎とする営みである。³⁰⁾ マルクスによれば、人間がおよそ歴史というものをもつかぎり五つの根源的契機を有する。1. 衣食住の欲求をみだす手段の産出、すなわち物質的生活の生産。2. 新しい諸々の欲求(Bedürfnis)の産

出。3. 生殖における他人の生命の生産。4. 社会的関係そのものの生産。5. 人間が意識をもつこと。³¹⁾

石井によれば、ここで、意識の発生・分化にかかわる最も重要な契機は欲求であり、これを充足する行為は実践である。すなわち、実践活動の成功のためには、対象の性質がいかなるものか知り、またいかなるものごとに価値があるかつかむ必要が生じる。ここに実践活動から相対的に区別されて人間の意識活動が分化する根拠があることになる。つまり、意識は実践から生まれ、また実践に帰っていくのである。³²⁾

この実践的意識が、対象に対する自己の態度の表明という意味で、価値の領域にあるものということになる。石井は述べている。

価値は「よさ」と総称できる。それは対象にそなわっている客観的屬性でも、人間が「よいと思うこと」でもなくて、一定の諸性質をそなえた対象に人間が一定の欲求をもって実践的に関係することから生じるものである。一言でいえば、欲求を満足させる対象やその性質のなかに「よさ」があり、価値がある。…中略…こうして、意識は認識の機能と価値づけの機能を有して人間生活のなかに働いている。³³⁾

この文脈から、上掲の社会意識を把握するうえで確認すべき2点について考えてみれば、次のようになると思われる。

すなわち、1の「生活の必要・要求からの対象への実践的かかわりの意識化」とは、対象形態への主体的価値づけを契機としてなされる・その対象形態についての価値意識と認識との統一的社会意識の形成を意味する。また2の「自己意識を介しての社会的事象の意識化」とは、1での対象への実践的かかわりを通じて確かめられ確立されてきた自己形態についての（認識を含んだ）価値意識を媒介としての社会的事象の解釈によって得られる・その事象形態についての社会意識の形成、を意味するということであろう。

したがって、以上の意識一般についての解釈から見ると、石井によれば、社会についての意識すなわち社会意識もそのなかに事実認識と価値意識の両側面をふくんでおり、その統一と考えなくてはならない。³⁴⁾

社会意識は、社会事象を対象とする意識が自己意識に媒介されて形づくられるという構造をもつ。社会事象のなかには意識主体である当の人間が、この事象に一定の利害関係をもちつつ含まれている。諸個人はさまざまな欲求、希望、願望、利害関心、規範意識、階層意識をもって生活しており、またそうした存在として自己を社会のなかに位置づけている。彼らは自分に了解された各自の立場から社会をみる。自己意識は社会意識を規定する有機的な構成要素として機能する。

35)

このような問題のとらえ方から明らかにしなければならぬ課題として、次のようなことが考えられよう。事実認識と価値意識とが諸個人においてどう結合されて社会意識となっているか。また、この社会意識形成の過程で成立する規範というものが、真の共同利害の反映したものか、あるいは特殊な社会集団の特殊利害の追及の手段であるかを理解した規範意識であるのか。さらに、その社会意識は、抑圧的な性格のものか(疎外された意識か)、解放的な性格のものか、あるいは抑圧的意識を解放的意識に転換しようとするものなのか。そして、これらの社会意識は意識発達のいかなる段階にあるものなのか。

これらの課題の解決を実質的になうものと思われる社会意識の発達の側面については、石井は次のように考えている。

社会意識の発展とは、社会意識を構成している二側面である、事実の認識と価値意識がともにより高い質を獲得していくことであるはずである。その内容は、一方では社会の認識が、表面にあらわれている現象の理解にとどまらずに、社会の構造・法則性・発展傾向などをつかむ本質的認識へと深まること、他方ではその意識の主体である人間の価値意識が、自分の本質的な欲求を表現した人間的価値意識へと高まることであり、その両者が有機的に統一されたものになること、であると思われる。社会意識の発展は、支配と抑圧を基礎として成り立っている社会のもとでは、抑圧され・疎外された意識から、解放的意識への転換をその中核に含むものである。ただ社会の静態的観察におわ

るものではなく、人間を人間として尊重する価値意識、人間を抑圧と疎外から解放する自覚をふくむものでなくてはならない。人間が尊重される明日へと志向する意識でなくてはならない。そしてこの意識の獲得過程は、同時に、様々な旧意識現状の誤認、支配体制への幻想、功利への執着、絶望とあきらめ、等を一步一步克服していく過程でもある。³⁶⁾

そして、このような社会意識の発達を促す意識変革は、次のようにしてなされるという。

意識は、意識と対象との矛盾、意識と意識との矛盾という二つの矛盾を原動力として運動する。このうち決定的なのは前者である。なぜなら新しい意識が発生してくるのは、新しい対象を経験すること、および古い対象と新しい経験をむすぶこと、以外にありえないからである。つぎに新しい意識のこうした発生と発展の過程で、自分のなかにある古い意識との矛盾・相克が問題となる。古い意識を克服して、新しい意識が勝利を占め安定的なものとなるには一定の時期の葛藤がある。³⁷⁾

ここから、この意識変革のためには、意識相互の作用・交流の問題、すなわち教育—学習の問題、実践の場での指導—被指導をふくんだ集団的意思形成が問題となるとされる。³⁸⁾

労働者階級は自分たちの生活のなかから、その資本にたいする共通の生活状態・要求・利害をもとにして、また資本にたいする共同の闘争のなかで、共通した認識と価値意識をつくりあげていく。こうした労働者階級の自覚(自己意識)を核とした意識が、階級意識であり、それは労働者大衆がみずからを自主的な階級として形成するための一要因として機能する。³⁹⁾ 階級意識は社会全体のなかでの自己の階級の把握にかかわるものであり、平常時と変動時では大きくかわる。したがって階級意識を問題とするにあたって、労働者意識のときどきの実態から出発しつつも、資本にたいする労働者の基本的位置関係からでてくる、意識の発展傾向をもとらえなくてはならない。⁴⁰⁾

一方、「社会的存在が社会意識を規定する」という命題は感情が社会的存在によって規定されるという意

味においてもまた重要である。⁴¹⁾ 社会的感情の形成と発達の契機として寺沢恒信が以下に述べるような側面も考えられると思われる。

農耕段階にある原始共同体では、同じ共同体に属する人々の中で特定の個人だけが悲しんだり喜んだりするできごとはほとんどなかったであろう。同じ共同体に属しながらある個人がある特定の派生的感情をもつという状態が生れたのは、私有財産の発生によって本来は喜ぶべき対象でありながらも喜ぶことのできない対象が生じ、感情に屈折を生じるようになったからである。まず怒りの感情が、そして対人感情に特有の尊敬・軽蔑・ねたみ・うらみ・あわれみ等々の感情がつぎつぎに生れたことであろう。この多様化の傾向は階級社会の成立によってますます拍車をかけられたにちがいない。というのは、生産力の発展によってたとえば衣服や食物についての好き嫌いの感情をもつ可能性が生れたし、階級の分化は社会関係を複雑にし、ますます多数の、複雑に屈折した対人感情を生み出したであろうからである。封建社会が解体して資本主義社会が成立すると、圧倒的多数の個人において個人意識が成立し、また同時に彼らは分化した・屈折した感情の持ち主になった。すべての個人における個人意識の成立が共同体からの個人の疎外に媒介されて成立したということが、成立した個人意識に歪みを生じた。ある個人の意識において認識と感情とが分離するのはその個人が社会集団から疎外されていると意識することによってである、という仮説を立てることができるであろう。資本主義社会において諸個人は自己をアトム的個人として意識し、社会的結合を第二次的結合として意識しているから、この社会における個人はすべて自分の認識と感情を分離させる可能性を持っている。これは感情に関する病理的現象である。⁴²⁾

4. 社会意識をとらえる方法について

以上の考察から、問題の現時点での現象的実態を知るといふレベルにとどまらず、その実態の構造的あり方と発達のメカニズムの理論的説明へと拡大すること

によって問題の本質と方向性を明らかにするために、示唆されるのは次のことである。

まず、社会的現実を的確にとらえた個々の現象的認識と社会全体についての虚偽意識との矛盾・対立、そして生活者としての価値意識と倒錯し疎外された価値意識との矛盾・対立、このような日常的認識と価値意識とを形成しているそれぞれの構成要素たる肯定的側面と否定的側面とが、いかに構造化して日常的意識を統一的に形づくり、またいかなるメカニズムでもってその質的転化＝発達を促しているかを理論的に探って、仮説を立てることである。そして、次に、社会意識の形成・発達の転換の契機となると考えられる要所要所が明らかとなるような項目を、この仮説に添ってとらえることによって、問題となっている社会意識の生成・変化・発達の過程とその方向性が科学的にえられるようにすることである。ただし、ここでの理論的仮説は、このことによって実証的に検証されるという側面も持ってはいるが、それは研究の二次的側面である。一次的にはこの理論的仮説のより高度な深化がうながされ社会意識の本質がさらに明らかにされていくことが眼目である。(その際、この理論的仮説の客観的妥当性は、基本的にはその論理的整合性で以てはかれる。)

さて、乳幼児期から老年期までの社会意識の発達の過程とそれを推し進めるメカニズムの解明のための具体的な考察材料をいかにとりだすべきかということが本稿の課題であった。ここでは、さしあたって教育現場において、子どもたちの社会意識がいかに形成・発達していくかを探るための基本的方法について考えてみたい。その時々、あるいは、ある地域の教育にかかわる実状を数量化して、推測や推定によって何らかの提言をするといった類いの調査法ではない、次のような活用法が考えられないだろうか。

それは、子どもの生活実態をとらえるための調査を、教育指導過程を媒介として行なうというものである。すなわち、実際の教育の場面において、子どもたちに対する指導の課題と方法を決定し、指導し、それを介しての変化の相を探り、研究に必要な材料を抽出し、

場合によっては指導やその計画の変更を図りながら、指導後変化した実態を見、次の課題を決定する、などの過程を通じて、子どもたちの人格や諸能力の発達の構造とメカニズムを明らかにするという教育学的研究に供するのである。

子どもの生活実態とそこでの問題点ないし課題を探るためのそのような調査の視点として、次のような観点が考えられよう。

1. 客観的に見て子どもとそれをめぐる実態はどうか(社会、教育、教師、家族、がいかなる形態でかかわっているか)。もちろん、これを、数量的に見るのではなく、そのような実態を生んでいる原因・要因と、それに至った過程とメカニズムを明らかにする。

そのために、まず、階層・地域・家庭事情の特定(これが即生活のあり方や姿勢を規定しているとは限らないが、現在の立場・状態に至っている事情、その間の過程での家族や子どもの意識の変遷過程にまで立ち入る必要がある。)と、場合によってはこれらを生み出している(国と地域のレベルでの)社会的・政治的諸関係とのかかわり(特に、政策的に拡散化されている価値の多様化と子どもとこれを取り巻く人々の虚偽的価値意識の不確定性と生活実態・意識とのかかわり)を探る。次に、発達をうながす意識変革のための、個人と集団との関係における意識相互の作用・交流を保障する教育—学習の体制、実践の場での指導—被指導をふくんだ集団的意思形成を保障する体制はいかなるものかを探る。これは、条件の側面だけでなく、その内容にわたってつかむ必要がある。

2. 子どもが自らの生活をどう見ているか(生活の場としての学校と家庭とのそれぞれにおいて)。

そのために、まず、自身いかなる土台のもとにいかなる制約を受けて生活しているかについての現時点での自覚の程度を見なければならぬ。そして、その制約性のもとでこれにそのまま従うかあるいはこれを越えいでうか、という緊張関係のなかでの自身の生き方はいかなる可能性があるかを、実践的生活活動においていかなる主体性をもって意識しているかを探る。

3. 1と2から引き出すこととして、まず、支配層が

求め意図している形態および大衆操作のために提供した事象形態(現象的認識と操作された価値意識)と子ども(それを取り巻く人々、あるいは彼らとの関係も含めて)が求め意図している形態(生活者としての価値意識)との「ずれ」(例えば、倒錯し疎外された虚偽意識)が、いかなる矛盾を引き起こしいかなる社会意識の形態の方向性と構造を生んでいるか、つまり、いかなる構造とメカニズムで以て意識が社会的に「操作されている」かを探る。次に、人格や諸能力の発達の段階と照らし合わせて、その実態のレベルはいかなるものか、また、発達の可能性はいかなるものかを見る。

これらの事柄を、事実認識と価値意識がともにどれほどより高い質を獲得していくか否かの側面で特定してとらえていく必要がある。すなわち、一方では社会の認識が、表面にあらわれている現象の理解にとどまらずに、社会の構造・法則性・発展傾向などをつかむ本質的認識へと深まること、他方ではその意識の主体である人間の価値意識が、自分の本質的な欲求を表現した人間的価値意識へと高まることであり、その両者が有機的に統一されて行きつつあるか、つまり、生活実態と意識とのずれを意識化し、主体的に生活のあり方を反省したり克服したりして、そのことによって自らの人格や諸能力を高めていくという、自らを主体的に「操作する」姿勢を持っているか否かをみるのである。

こうした調査を実際に行う方法として、認識と価値意識との統一体としての人格の発達の理論的仮説を立て、人格や諸能力の形成・発達の転換の契機となる要素所が明らかとなるような項目を仮説に添って挙げ、それを調査することによって、問題となっている社会意識の生成・変化・発達の過程とその方向性が単なる推定や推測によるものではなく、科学的にとらえられるようにするといった要件が考えられよう。

その際の理論的仮説のポイントとして、「生活の必要・要求からの対象への実践的かかわりの意識化」、すなわち対象形態への主体的価値づけを契機としてなされる、その対象形態についての価値意識と認識との

統一的社会意識の形成と、そして「自己意識を介しての社会的事象の意識化」、すなわち対象への実践的かかわりを通じて確かめられ確立されてきた自己形態についての（認識を含んだ）価値意識を媒介としての、社会的事象の解釈によって得られる、その事象形態についての社会意識の形成とが挙げられよう。この二側面の意識化は人間の対象への実践的かかわりを媒介として統一的になされるのである。

主体的記述の例として、たとえば作文なども有効であろう。そこでとらえるべきこととして、次のような事柄が考えられる。

・生活の場としての学校や家庭で、個と集団との関係において、意識と対象との矛盾、意識と意識との矛盾という二つの矛盾を原動力としてなされる発達を促す意識変革がなされているか。すなわち、新しい対象を経験すること、および古い対象と新しい経験をむすぶ過程で、自分のなかにある古い意識との矛盾・相克をいかに問題とすることによって新しい意識を発生させ発達させているか。

・共通の生活、共通の生活状態・要求・利害、共通の課題に対する共同の働きかけのなかでつくりあげられる、共通した認識と価値意識、自覚（自己意識）を核とした意識、社会的感情の形成と発達はいかになされているか。

以上、おそらく大半の人々が、「このような調査法は不可能だ」と批評するものと予想される調査法についての諸視点を掲げた。これは、なによりもまず基本とし堅持すべきであろう研究姿勢として掲げたものである。そして、調査しようとする対象の特殊性に即してそのつどその構造とメカニズムについての仮説を立てたうえで、調査を継続的かつ繰り返し実行し、その結果からの考察を通じて社会意識や社会的感性の発達メカニズムについての理論的構築をさらに深めるといふ形で、可能な限り推し進められていくことが最も必要なことと思われるのである。

「生活がそうあるべきだとされるよう生活をわれわれがそこにみるところの存在物が美しいのであり、生活をみずからのうちにあらわしているとか、生活についてわれわれに想い起こさせるとかする対象が美しいのである。」⁴³⁾

チェルヌイシェーフスキーのこの言には、われわれが生活を主体的につくりあげていく契機と、逆にそのつくりあげた生活に制約される形でその中の事象や人間を対象としてこれに美的価値をおぼえるという契機との、矛盾的統一体のうちに形成された社会的感性のあり方が示唆されている。

これまでの考察の視点からすれば、社会的感性とは、社会（生活形態を含む）を対象としてこれをどう感性的ないし美的にとらえるかという意識であろう。そして、この中核には、ある社会集団の成員に共有されている美的感性を含む、意識主体の美的自己意識が存在するということになる。したがって、社会的感性の発達は、この意識を構成している社会的事実の認識とこれを方向づける美的価値意識（美的感性）とが有機的に統一された形でともに質的に高い質を獲得していくことではかられることになる。

しかし、社会的感性の問題を追究するにあたっては、社会認識との関係の問題はもとより、この感性が社会意識のいかなる構成部分となっているかの問題、またこの意識の形成・発達といかにかかわっているかの問題、あるいはヤン・ムカジヨフスキーの言う「社会的総体」と結びつく「美的機能」の問題⁴⁴⁾などを解明することからはじめなければならない。いずれにしても、これらの問題解明の端緒をつかむためにも、本稿で考察した「調査」法がさらに具体化される必要があるだろう。

註

- 1) Immanuel Kant, *Kritik der Urteilkraft*, Philosophische Bibliothek Band, 39a, Herausgegeben von Karl Vorländer, 1799, S.18. (原板頁)
- 2) Ebd., S.28-29, 65-67.
- 3) 水野邦彦『美的感性と社会的感性』(見洋書房, 1996年), 90頁。
- 4) 前掲書, 139頁。
- 5) 前掲書, 146-7頁。
- 6) 前掲書, 147頁。
- 7) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Werke, Bd.13., S.8-9.
- 8) Engels an W. Borgius in Breslau, Werke, Bd.39., S.206.
- 9) Marx/Engels, *Die deutsche Ideologie*, Werke, Bd.3., S.26, 27.
- 10) 石井伸男『社会意識の構造』(青木書店, 1986年), 24-25頁。
- 11) Engels, a.a.O., Werke, Bd.39., S.9.
- 12) Marx/Engels, a.a.O., Werke, Bd.3., S.32.
- 13) 岩崎允胤『人間と社会の弁証法 社会科学の認識論』(梓出版社, 1984年), 73頁以降。
- 14) 石井, 前掲書, 9頁。
- 15) 前掲書, 9頁以降。
- 16) 宮島喬『現代社会意識論』(日本評論社, 1983年), 18頁。
- 17) 前掲書, 214-217頁。
- 18) 前掲書, 240頁。
- 19) 前掲書, 243頁。
- 20) 庄司興吉「現代労働者の社会意識」福武直監修/見田宗介編『社会学講座12 社会意識論』(東京大学出版会, 1976年)所収, 230-235頁。
- 21) 田中義久「社会意識研究の現実的課題」福武直監修/見田宗介編『社会学講座12 社会意識論』(東京大学出版会, 1976年)所収, 82-85頁。
- 22) 石井, 前掲書, 10-13頁。
- 23) Karl Marx, *Thesen über Feuerbach*, Werke, Bd.3., S.5.
- 24) 山科三郎『人間発達の哲学』(青木書店, 1986年), 190頁。
- 25) 岩佐茂『人間の生と唯物史観』(青木書店, 1988年), 98-102頁。
- 26) 石井, 前掲書, 30-31頁。
- 27) 前掲書, 31-33頁。
- 28) 前掲書, 35頁。
- 29) 前掲書, 37頁。
- 30) 前掲書, 38頁。
- 31) 前掲書, 39頁。
- 32) 前掲書, 55, 5頁。
- 33) 前掲書, 60頁。
- 34) 前掲書, 62頁。
- 35) 前掲書, 64頁以降。
- 36) 前掲書, 120-121頁。
- 37) 前掲書, 122-123頁。
- 38) 前掲書, 133頁。
- 39) 前掲書, 179頁。
- 40) 前掲書, 180頁。
- 41) 寺沢恒信『意識論』(大月書店, 1984年), 227頁。
- 42) 前掲書, 227-236頁。
- 43) チェルヌイシェーフスキー著, 森宏一訳『現実への芸術の美学的関係』(同時代社, 1986年), 20頁。
- 44) ヤン・ムカジヨフスキー著, 平井正・千野栄一訳「社会的事実としての美的機能, 規範および価値」『チェコ構造美学論集 美的機能の芸術社会学』(せりか書房, 1975年)所収, 128頁以降。

(1997年12月1日 受理)